広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	伝記記述と作家の生涯 : 日本におけるシラノ・ド・ベルジュラックの受容
Author(s)	野呂, 康
Citation	フランス文学 , 32 : 91 - 101
Issue Date	2019-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048132
Right	
Relation	

伝記記述と作家の生涯

日本におけるシラノ・ド・ベルジュラックの受容[1]

野呂　康

大正年間に発刊された定期刊行物『赤い鳥』に、楠山正雄による「月の世界」という話が掲載されている[2]。シラノ・ド・ベルジュラックの『月の諸国諸帝国の滑稽譚』という小説を書き直した，いわゆる再話である[3]。翻訳ではなかったが，これはシラノ・ド・ベルジュラックの執筆した作品の、我が国における最初の紹介となる。とはいえ、「シラノ」の名は作品が紹介される前からよく知られていた。まずはその間の事情から見ておきたい。

1.　「シラノ」をめぐる状況

シラノの本名はサヴィニアン・シラノ・ド・ベルジュラックで、1619 年にパリで生まれ、1655 年にパリ近郊のサノワで死んでいる。当時のカトリック思想を疑う自由思想を吸収し、 2 つの戯曲、2 つの小説の他、書簡集などの著作がある。今日文学史においては、ジャンルとしての小説の黎明期に執筆された『月の諸国諸帝国の滑稽譚』[4]とその続編にあたる「太陽編」がとりわけ名高い。月世界への旅行という SF の嚆矢をなす設定[5]、登場人物である語り手が遭遇する月世界の住人とその奇抜な習俗の記述が注目を集めてきた。

さて、このフランスの作家の名前を知らしめたのは、しかし作家が執筆した作品ではなく、19 世紀の作家エドモン・ロスタンの手になる戯曲『シラノ・ド・ベルジュラック』であった。以下、我が国における「シラノ」の紹介について、略年譜を参照されたい。

1897 年　エドモン・ロスタン作『シラノ・ド・ベルジュラック』が、フランスで初演される。
1913 年　五来素川訳（部分訳）『白野十郎』

---

[1] 本稿は 2018 年 12 月 2 日に広島大学で開催されたシンポジウム「鈴木三重吉創刊『赤い鳥』とフランス語文学の移入と再話」における発表「伝記記述と作家の生涯　―シラノ・ド・ベルジュラックの項目」に加筆・修正を加えたものである。

[2] 鈴木三重吉主幹『赤い鳥』大正 14 年（1925 年）1 月号～3 月号。

[3] 註 1 で触れた発表の発端は、2018 年に柏書房から出版された『赤い鳥事典』に「シラノ・ド・ベルジュラック」の項目を寄稿したことによる。「再話」の詳細については、そちらを参照されたい。

[4] 既訳は以下のとおり。シラノ・ド・ベルジュラック著　有永弘人訳『月世界旅行記』（弘文堂書房、1940）；有永弘人訳『日月両世界旅行記』（岩波書店、2 巻本、1951）；伊藤守男訳『月と太陽諸国の滑稽譚』（早川書房、1968）；赤木昭三訳『別世界または日月両世界の諸国諸帝国』（岩波書店、1996）；赤木昭三訳『日月両世界旅行記』（岩波書店、2005）。発表および本稿の執筆は、以下の研究書を含む赤木氏の仕事に多くを負う。赤木昭三、『フランス近代の反宗教思想』東京、岩波書店、1993。

[5] 星新一「シラノ・ド・ベルジュラック　架空対談」東京、作品社、1987＜日本の名随筆 57　謎＞、p.107（初出：奇想天外社、1980）。

1919 年　辰野隆と鈴木信太郎共訳『シラノ・ド・ベルジュラック』（雑誌『ろざりよ』連載）
1920 年　楠山正雄訳『シラノ・ド・ベルジュラック』（『近代劇選集』第 2 巻、新潮社）。
1922 年　辰野−鈴木共訳『シラノ・ド・ベルジュラック』上演。後に白水社から刊行される。
1922 年　楠山訳『シラノ・ド・ベルジュラック』（『泰西戯曲選集』第 5 巻、新潮社）、『近代劇大系』（第 11 巻、1924 年刊行）が刊行される。
1925 年　楠山の「月の世界」が『赤い鳥』に掲載される。
1926 年　楠山訳、額田六福演出による翻案劇『白野弁十郎』
1927 年　イナガキ・タルホ（稲垣足穂）「シラノ・ド・ベルジュラックの月世界旅行」発表。
1940 年　シラノ・ド・ベルジュラック（有永弘人訳）『月世界旅行記』
1951 年　辰野−鈴木共訳『シラノ・ド・ベルジュラック』が岩波文庫に入る。

ロスタンの戯曲はフランスでの初演が 1897 年であり、五来素川（五来欣造）による日本での初紹介が 1913 年であった。それ以降陸続とロスタンの翻訳と翻案、上演が行われるが、作家シラノの作品が訳出されたのは、以下で触れる 2 つの再話を除くと、1940 年の有永訳『月世界旅行記』が初めてである。すなわち日本で「シラノ」といえば、五来による翻訳紹介以降四半世紀以上もの間、ロスタンの戯曲、あるいはその登場人物を指していたわけである。

それでは作品紹介がほぼ皆無の状況下で、楠山正雄による再話（1925 年）、そしてもう一つのイナガキ・タルホによる再話（1927 年）はどのように読まれたのであろうか。

2.　楠山正雄「月の世界」

楠山正雄による再話「月の世界」では、まず冒頭に作家紹介としての「はしがき」が、続いて「お話のはじまり」が配置されている。このことから、楠山が意識的に作家紹介とお話としての再話部分を分けていたことがわかる。

> **はしがき**　このお話はフランスの十七世紀（今から二百五六十年前）に、大きな鼻の詩人で名高かったシラノ・ド・ベルジュラックといふ人の書いた月の世界の旅行記です。お話のなかで「わたし」といっているのはシラノ自身のことと思ってください。このシラノのことは、つい二三年前になくなった、やはりフランスのエドモン・ロスタンといふ、えらい文学者がシラノ・ド・ベルジュラックという題の、それはおもしろい芝居を書いて、「哲学気ちがひ、数学者、詩人、剣客、音楽師、月の世界の浮浪人、数の知れない決闘と、下にも風を引かせぬ男」といっています。「月の世界」のやうな、おもしろいお話を書いているほかに、なかなかめづらしい経歴をもった人であったのです。
> **お話のはじまり**　（以下省略）[6]

引用中、「シラノ・ド・ベルジュラックといふ人の書いた月の世界の旅行記」とあ

[6] 楠山正雄「月の世界」『赤い鳥』(1925 年 1 月号)。棒点と下線による強調は引用者による（以下同様）。

るところから、ここで言及されている「シラノ」は一先ず、書き手としての作家を指していると考えられる。しかし、すぐ直後で「お話のなかで『わたし』といっているのはシラノ自身のこと と思ってください」と、これから語る「お話」に登場する一人称の「わたし」は作家シラノと見なしてほしいという要請がなされる。つまり、題名にある「月の世界」という「お話」は「わたし」である作家シラノが実際に体験もし執筆もしたという設定が導入されているのである。もちろん、「わたし」＝シラノとされても、読者としては「二百五十年前」の作家が実際に月へ行ったとは考えるはずもなく、あくまで語りに引き込むための仕掛けに他ならない。

続けて楠山は、「このシラノのことは」、「二三年前に」亡くなった「エドモン・ロスタンといふ、えらい文学者」が書いた「それはおもしろい芝居」に参照を促す。ところで「この」という指示形容詞は何を指しているのだろうか。作家としてのシラノだろうか、それとも「お話の中」で一人称の「わたし」で語る登場人物としての「シラノ自身」だろうか。「この」が指すものが実在の作家か、語り手としての登場人物か、その境界を曖昧にしたままで、楠山は戯曲にある台詞を引用し、「『月の世界』のやうな、おもしろいお話を書いているほかに（以下で語られる「お話」を指す）、なかなかめづらしい経歴をもった人であったのです」とまとめている。すなわちここでのシラノとは、ロスタンによる台詞で描かれた登場人物でありながら、「おもしろいお話を書いている」作家である。楠山は、ロスタン描くところの「シラノ」が「めづらしい経歴」を持ち、その作中の人物である「シラノ」が書いたお話が「月の世界」であり、その「お話」の登場人物も「シラノ」だというのである。これはかなり突飛で込み入った構造であるが、ここでは楠山が月世界という「おもしろいお話」にフィクション性を担保しつつ、作家についてはロスタンの「おもしろい芝居」という別のフィクションに参照を促しながら実在の作家シラノを紹介している点に注意してほしい。楠山の記述においては、フィクションと実在という区分自体が全く未分化のまま、物語が展開されてゆくのである。

3.　イナガキ・タルホ「シラノ・ド・ベルジュラックの月世界旅行」

楠山による再話の２年後、今度はイナガキ・タルホが、はるな・しらうの挿画を添えて再話「シラノ・ド・ベルジュラックの月世界旅行」を発表する。

もしあなたがどこかで、羽根のついたつばひろの帽子をよこちょにかむり、首輪のある中世紀の衣裳をつけて剣をかざしている大きなとがり鼻の勇士の絵をごらんになったことがあるなら、それこそここに云はうとしているシラノドベルジュラックなのです。その鼻がたぐひまれであったやうに、この人はまた大へんな風変つた気質の持ち主として知られていました。哲学者であり、数学者であり、詩人であり、音楽師であり、軍人であり、剣客であり、伊達男であり、ちょっと口には云へぬ肩書きで、数知れぬ決闘のうちに一度も負けたことがないといふつよさの一面には、数多くのりっぱな詩や物語や戯曲を今日にのこしています。(...)そんなシラノの生涯についてはエドモンロスタンといふ人のかいた有名な芝居がありますから、あなたはいつかごらんになるでせうし、またお父さん

か兄さんにおききになるのもいいでせう。

十七世紀の前半と云ひますから、今から数へれば三百年ちかくになる或る秋の夜のことでした。このシラノドベルジュラックは数名の友だちと一しょにパリーの郊外から帰りの途をいそいでいました[7]。

導入部では、記述が挿絵に参照を促し挿絵は記述を敷衍し、読者にシラノを想い描かせる仕組みが施されている。挿絵はいかにもありふれた西洋の騎士のポートレイトであり、描かれた人物は若干戯画化されてはいるとはいえ、歴史画にありがちな風貌をしている。シラノはここで、歴史を題材とした絵画に登場する、人がかつてどこかで見かけたような人物である。読者の眼差しは記述と挿絵を往復しつつ、その実、記憶の中の歴史絵画というフィクションの中に、既知の（「ごらんになったことがある」）、一般化された歴史上の人物を読み取るよう誘われる。

こうして導入された登場人物について、イナガキはさらに、実際には「大へんな風変つた気質の持ち主として知られていました」という。読者はこうした過去の断言の背後に、イナガキの個人的な見解ではなく典拠を想像するだろう。ところがこれに続く「哲学者であり、数学者であり…」は、既に楠山も引用していた戯曲の台詞である。引用符はなく典拠の明示もなく、「数多くの立派な詩や物語や戯曲を今日にのこしています」と語り手による断言がはいるため、読者は実在の作家の人物紹介と受け取ることになる。さらに「そんなシラノの生涯について」はロスタンの「有名な芝居」に参照を促すわけで、そこまでの紹介とロスタンの「有名な芝居」では情報源が異なることが言葉巧みに仄めかされている。とはいえイナガキにとってもシラノとはロスタン描く「シラノ」であり、引用符の無い引用から汲み取れるように、戯曲において言及されている人物を直接的に指していることに変わりはない。

次の段落からは物語に入る。ここでイナガキは原作における語り手としての「私」を「このシラノドベルジュラックは」と三人称に置き換えた。ここでもまた指示対象を特定できない指示形容詞が導入され、置換の操作と相まって、作中で月世界旅行をするシラノが作家本人あるいは語り手をさすのか、ロスタン劇の登場人物なのか、以下の再話で語られる登場人物なのか、すべての境界が判然としなくなる。

楠山が「お話のなかで「わたし」といっているのはシラノ自身のことと思ってください」として読者の想像力に訴えかけていたのに対し、イナガキは主語を「シラノ」に置き換え、さらに直接的に登場人物としての「シラノ」が月世界旅行者、執筆者であることを印象づけた。実在した作家である「シラノの生涯」に関しては、ロスタンの戯曲というフィクションに参照を促し、自らの再話というフィクションには「このシラノドベルジュラックは」という実在の作家名を導入してリアリティを醸し出す。こうしてイナガキは、フィクションとリアリティを巧みに交差させたわけである。

---

7 イナガキ・タルホ（稲垣足穂）話　はるな・しらう画「シラノ・ド・ベルジュラックの月世界旅行」『婦人グラフ』（1927 年 4 月、国際情報社）。本文中の「シラノドベルジュラック」という表記は原文を尊重した。

4. 有永弘人[8]による『月世界旅行記』の「解説」

それでは我が国で初めて、シラノの『月世界旅行記』を訳した有永弘人による解説を読んでみよう。

> サヴィニヤン・シラノ・ド・ベルジュラックは 1619 年 3 月 6 日に洗礼を受け、1655 年 7 月 28 日永久に天界に昇った。彼の伝記に関する文献的研究は 1910 年に始めて完成されたが、その詳細をここに縷述することは煩を避けてやめよう。それよりも、寧ろ去ってロスタンの不朽の劇作を鑑賞するに如くはない。ただ文献の発見まで、専ら南仏ガスコーニュ地方の生まれであると伝えられていたのが、現在では否定せられたことを繰り返しておこう。彼は巴里で生まれて巴里で死んだ[9]。

ちなみに有永は解説の末尾において、既刊の版本や全集を列挙している。したがって引用にある「文献的研究」についても当然目を通していた。しかし「その詳細をここに縷述することは」敢えて避けるとし、こと「彼の伝記に関する」限り、「ロスタンの不朽の劇作」に参照を促す。さらに有永はロスタンを典拠としない情報をつけ加えている。まるでロスタンの戯曲中、補足・修正すべきは出生地に関する情報にすぎないかのごとく。本書はシラノの作品の本邦初の翻訳であり、有永の解説は明らかに学術的な装いを呈している。それでもこと伝記記述に関しては、ロスタンの戯曲が伝記としてほぼそのまま受け入れられていることが窺えるだろう。

5. エドモン・ロスタン作（辰野隆、鈴木信太郎訳）『シラノ・ド・ベルジュラック』[10]

最後に、有永の師にあたる辰野隆[11]と鈴木信太郎[12]によるロスタンの翻訳と解説をみる。訳者は解説冒頭でロスタン描くところの「浪漫的人物」を紹介した後、「果た

---

8 有永弘人(1906-1992)　1930 年に東京帝国大学仏文科を卒業。後に東北大学教授となる。有永は以下で触れる辰野隆、鈴木信太郎の下でフランス文学とその方法論を学んでいる。

9 シラノ・ド・ベルジュラック（有永弘人訳）『月世界旅行記』弘文堂、1940、「解説」、p.159。

10 二人の訳者による翻訳については幾つかの版本があるが、便宜上現在でも入手の容易な岩波文庫を参照した。以下の「解説」は、二人の訳者が連名で 1951 年に執筆しているが、これも便宜上の理由から本稿では「訳者」で統一する。

11 辰野隆(1888-1964)　東京帝国大学教授。1921 年仏文科初の日本人助教授に任命された辰野は 2 年間の留学を経て帰国後教授に昇任し、1948 年定年で退官するまで主任教授として教鞭をとった。

12 鈴木信太郎(1895-1970)　1917 年同人誌「ろざりよ」の創刊に携わり、1919 年同誌に辰野とロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』の共訳の連載を開始する。1920 年に文学部副手、翌年には講師となる。1922 年に『シラノ・ド・ベルジュラック』を上梓した。1931 年助教授、47 年には教授に昇任し、56 年の退官まで教鞭をとる。1962 年には日本フランス語フランス文学会の初代会長となった。

して本物のシラノは、全く脚本の通りの人物であったろうか[13]」という問いを立てている。こうして作家と、作品に書かれた登場人物の関係を問う本稿にとってまさに本質的な問いが発せられるのだが、直後において「然しながら大綱は大体現実の人物である」と、典拠の提示もなくあっさり肯定されてしまう。続いて、楠山もイナガキも用いた戯曲の台詞が引用される。

> ロスタンのシラノが第五幕で自分の墓碑銘を詠んで、
>
> 哲学者たり、理学者たり、
> 詩人、剣客、音楽家、
> 将た天界の旅行者たり、
> 打てば響く毒舌の名人、
> さてはまた私の心なき　―恋愛の殉教者！―
> エルキュウル・サヴィニヤン・
> ド・シラノ・ド・ベルジュラック此処に眠る、
> 彼は全てなりき、而して亦空なりき[14]。
>
> と、痛手を負いながら、よくも言い得たのであるが、実在のシラノもその通りである[15]。

「実在のシラノもその通りである」。訳者は「哲学者」としてのシラノ、「理学者」としてのシラノ云々と、台詞にあるシラノ像に沿って「実在のシラノ」の証拠を次々に提出し、台詞の真偽の検証をしてゆく[16]。

13　岩波文庫版、p.305。

14　楠山とイナガキの再話でも引用されていた部分であるため、ここでは原文を記しておく。« Philosophe, physicien / Rimeur, bretteur, musicien, / Et voyageur aérien, / Grand riposteur du tac au tac, / Amant aussi — pas pour son bien ! — / Ci-git Hercule-Savinien / De Cyrano de Bergerac / qui fut tout, et qui ne fut rien. »(Edmond Rostand, *Cyrano de Bergerac*, V-5)。 riposter du tac au tac「丁々発止と切結ぶ、即座にやり返す」。tac は「(フェンシングなどの) カチャという音」の他、「黴瘡（ばいそう）」すなわち梅毒の意味もある（『模範佛和大辞典』白水社、大正 10 年刊(1921)）。楠山の「下にも風を引かせぬ男」、イナガキの「伊達男であり、ちょっと口には云えぬ肩書き」は、この病を意識した表現であろう。

15　前掲岩波文庫版、pp.306-307。

16　ここで現代の学の知見に照らして二人の訳者を批判することは、本論の目的でも本意でも全くない。そのような時代錯誤は無意味と考える。したがって知識ではなく、訳者の手続きに関して二点のみ、指摘をしておきたい。第一に、訳者は「シラノが詩人であること」を証するために、「今日まで文学者として名が残っているのが何よりの証拠」というが、これは文学史なる一つの伝統を前にした、あまりに素朴な態度と思われる。裏を返せば、或る文学史の書物に名が出ていなければ、それだけで「詩人」ではない、大作家とは認められないとする考え方と表裏一体をなすからである。第二に、「シ

だがここで立ち止まろう。ロスタンが表象したシラノとはあくまで劇作家によるフィクションに属する。これは誰もが認めるところだろう。それは戯曲を訳した訳者自身が承知しているはずである。にもかかわらず、そのフィクションから実在性と作家の実像を抽出しようというのだ。

> さて次に、ロスタンが「打てば響く毒舌の名人」と書いたことは、シラノが発表した書簡体の短文集や、前述『別世界』の中に現れた諷刺や皮肉や、『レ・マザリナアド』の中の諷刺や、短詩の中の罵言などで、明瞭に解る[17]。

ラノは『レ・マザリナアド』と称された一群の宰相マザラン諷刺詩集の一つを1649年に出版している」という言及に関して、原典に一瞥も与えずに断言し、剰え「実在のシラノ」の証拠とするのは納得のいかないところである。問題は以下の手続きである。1）訳者は『レ・マザリナアド』を確認していない。これは続く箇所で「『レ・マザリナアド』の中の諷刺」が引き合いに出されているところから、実物を見ていないのはほぼ確実である。2）訳者が参照したはずの刊本に掲載されていた可能性があるのは「諷刺詩集」ではなく、シラノに帰される幾つかのパンフレ（マザリナードに分類される冊子）あるいは諷刺詩であるが、それも読んでいない、3）それらのパンフレがシラノのものかどうか検討することなく、「実在のシラノ」の証拠として用いている。繰り返しになるが、現在の知見から半世紀以上も前に書かれた解説を批判したいのではない。あくまで手続きの妥当性への疑問である。況や訳者の二人ともが、アカデミズムの権化たる最高学府の教授であってみれば、読者は必然的にそこに権威を認めざるをえないからである。ちなみに、シラノが（レ）マザリナードの名称で一括りにされる1648年～1653年の文書群の幾つかを執筆し、実際に文書合戦に参戦したかどうかについては、最も信頼にたる最新の研究では否定されている。幾つかのパンフレにある「D.B.」なる署名をDe Bergerac,「B.D.」というまた別の署名をBergerac-Dyrconat（Cyranoのアナグラム）と読んで同一視するという，19世紀に由来する憶測が存在したが、これだけでは根拠薄弱ということで否定されるに至っている。 Madeleine Alcover et al. éd., *Œuvres complètes*, Paris, Honoré Champion, 2006, 3vol（特に編者アルコヴェールによる総論を参照されたい）。但し生前の1654年に刊行された『作品集』に収録されている「スカロンへの反論」や「フロンド派への反論。手紙第20」（*Œuvres diverses*, pp.227-228）については、定義次第ではマザリナードと見なせなくもない。それでもマザリナードの執筆が否定されるのは、この「手紙」が単体のパンフレとして印刷された形跡がなく、あくまで文書合戦の終了後に刊行された書簡集に含まれたテクストであるためであろう。マザリナードの定義および、近年飛躍的に発展した現在の研究状況については、以下の研究および拙訳を参照されたい。クリスチアン・ジュオー（嶋中・野呂訳）『マザリナード　言葉のフロンド』（水声社、2012）；同（野呂他編訳）『歴史「と」エクリチュール』（水声社、2011）；拙著『古典資料センター所蔵「マザリナード」の現在』（一橋大学社会科学古典資料センター、2010）。

17 前掲岩波文庫版、p.311。

以上長々と述べたところは、ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』が如何に実在のシラノに則って創造されているかを説明したのであるが、この実在のシラノだけをそのまま如何に克明に説明しても、劇の中に於ける現実感は浮かび上がらない。その背景をなす一点一画全てに、実在の、或は、歴史的現実の裏づけがなければならない[18]。

「詩人」、「打てば響く毒舌の名人」の検証では、「『レ・マザリナアド』と称された一群の宰相マザラン諷刺詩集の一つ」が挙げられ、戯曲の台詞にはない未知の情報を付加することで、訳者はフィクションに現実性を付与しようとする。

引用末尾において、「以上長々と述べたところは、ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』が如何に実在のシラノに則って創造されているかを説明したのである」とされている。訳者はロスタンの作品が「創造」すなわちフィクションであることを前提に、「劇の中に於ける現実感」を浮かび上がらせるために、「その背景をなす一点一画全てに、実在の、或は、歴史的現実の裏づけ」が与えられているのだという。要するに、創作としてのフィクションは「実在の、或は歴史的現実の裏づけ」がある限りフィクションではないという主張であろう。こうして戯曲に書き込まれた「シラノ」は、学術的な装いの下で、「実在のシラノ」と完全に一致することになる。

一連の操作は次の通りである。１）訳者はロスタンによるフィクションに現実性を想定し、２）シラノのものとされる詩や戯曲などのフィクションを「実在の、或は、歴史的現実の裏づけ」として用い、３）翻って、それらを用いて創造されたロスタン劇自体に伝記が読み込まれ､戯曲というフィクションが現実(「実在のシラノ」)の証拠となる。こうした操作を経て、ロスタンを通したシラノこそが「実在のシラノ」として表象されるに至った。

以上、一方に再話というフィクションでシラノを表象した楠山とイナガキ、他方に学術的装いの下に提示された翻訳と文学研究の営みがあるわけだが、実際のところ双方ともに、ロスタンによる創作を伝記として扱い、そこに「実在のシラノ」を読み込みつつ、作家を表象していたことになるのである。

6.　19 世紀に成立した文学研究の方法論　作家と作品

ところで有永にせよ辰野-鈴木にせよ、シラノに関する「文献的研究」の存在は認識していた[19]。言い換えるなら、作家シラノについては、或る程度まで最新の研究

---

[18] 同、p.316。

[19] 有永が云う「文献的研究」とは、主に辰野-鈴木による幾つかの紹介の他、19～20 世紀に刊行された作品集を指す。 20 世紀に入り『月の諸国諸帝国』の新たな写本が発見され、1911 年、1921 年、1932 年と､ほぼ十年おきに異なる写本に基づく本格的な校訂版が刊行されている｡有永の底本は 1921 年のフレデリック・ラシェーヴルの刊本であったことが明記されている(Frédéric Lachèvre éd., *Les Œuvres libertines de Cyrano de Bergerac, Parisien(1619-1655)*, Paris, Champion, 1921, 2vol.)。楠山、イナガキの再話も辰野-鈴木の翻訳も、奇しくもしきりに校訂版が出版された時期に重なる。しかし特に楠山とイナガキがこうした学術的な成果に注目していたという形跡はない。

が踏まえられていたはずである。にもかかわらず、なぜロスタンの文学作品から作家像を読み取るという営みが継続されてきたのだろうか。「シラノ」の受容を辿るという本稿の主旨からは外れるが、現代からみて考えられる要因を 2 つだけ指摘しておきたい。

第一に作家と作品に着目し作品から作家像を導き出すというのは、19 世紀に確立され、部分的には今日まで継続されている文学研究の一つの方法である。世紀末に書かれたロスタンの戯曲は、まさに作家名を冠した作品で作家像を描く、文字どおり文学研究の方法を擬似的に体現している。擬似的にというのは、文学史における作品を通した作家研究なるものは、当該の作品を書いた作家を研究するものだからである。『エセー』からモンテーニュの思想と生涯が導きだされるように、本来ならロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』には作家ロスタンの思考、生涯が探られるところであろう。しかし、そうはならなかった。とはいえ形式上ロスタンの戯曲は、創作の装いを呈した作家研究と見なされたのではないだろうか。第二に、特に 19 世紀の後半において、フランスにおける国民作家意識が醸成されていった事情が考えられる[20]。当時刊行されつつあった＜大作家叢書＞に入ることはなかったが、シラノは当時の古典作家を顕彰する動きの中で再「発見」されたばかりの作家であった[21]。したがって研究の進んでいなかった作家シラノに関しては、ロスタンの戯曲が伝記として機能したわけである。戯曲を用いて作家を表象したロスタンは、その作品自体を文学研究の枠組みに準じて構築したばかりか、自ら執筆するという行為により、その枠組みを強化することにもなった。そこにシラノの伝記記述の欠如という事情が関係したのは言うまでもない。いずれにせよ、少なくとも我が国において「シラノ」を受容するに際して、このロスタンの採用した文学史と文学研究

---

[20] 19 世紀末に国民国家意識が高揚し、それに由来するナショナルな言語と文学が強化されてゆく。それが植民地政策と結びついていたのは改めて指摘する要もあるまい。フランスでは 19 世紀前半のロマン主義時代に、同時代文学と差異化をはかるべく、先人としての古典主義文学という概念が生み出される。以降古典主義作家の顕彰、古典文学の聖典化、それを可視化するための全集の刊行などが推進される。国家事業の様相を呈した＜大作家叢書＞が刊行されはじめるのも 1860 年代以降のことである。

[21] 前註で触れた古典主義文学の再評価と発掘の機運の中、大作家の傍らに、その揺籃期における諷刺、リベルタン（自由思想家）の作家の一人としてシラノが再「発見」されることになる。シラノには死の前年に刊行された『作品集』の他、死後遺稿として友人ル・ブレが編んだ『新作品集』があったが、「愛書家ジャコブ」によると、稀覯本とまでは言わないまでも長らく容易にアクセスできる状態にはなかった。このような状態を打破しようとしたのが 1855 年に刊行された Le Blanc による編集本であり、1858 年に「愛書家ジャコブ」こと好事家ポール・ラクロワがまとめた作品集であった。Le Blanc(notice), *Œuvres de Cyrano de Bergerac*, Paris(Victor Lecou)-Toulouse(Librairie centrale), 1855 ; P.L. Jacob, Bibliophile(Paul Lacroix) éd., *Histoire comique des états et empires de la lune et du soleil par Cyrano de Bergerac*, Paris, Adolphe Delahays, 1858.このときシラノは新たに「発見」された。この再評価に乗じる形で、ロスタンは 1897 年に『シラノ・ド・ベルジュラック』を執筆し上演したのである。とはいえ既述の通り、『月の諸国諸帝国の滑稽譚』に限られるとはいえ、写本に基づく校訂版が編まれ、本格的な研究が現れるのは 20 世紀に入ってからのことである。

の枠組みが極めて有効に機能したのは、本論において確認してきた通りである。

本稿を締めくくるにあたり、予想される一つの誤解について予め注意を促しておきたい。本論は伝記記述の観点から、ロスタンによる創作（フィクション）を用いてシラノという作家の生涯を表象する営みを否定するものではない。私は一方で、創作としてのフィクションだから伝記として信用できないという見解を、他方で文献を駆使した研究だから真実に違いないという見解を共に排した[22]。ロスタンの戯

---

[22] 現代において最も利便性が高い伝記記述がインターネット上の Wikipedia により提供されているのは、その可否を問わなければ、おそらく万人の認めるところであろう。執筆者の纏う権威の上下を問わず誰もが無記名で書き込むことができ、学問の進捗や知見の深化に合わせて自在に、そして不断に書き換えがなされる。また、知識がインターネットという開かれた媒体で提供され、誰もが即座に、容易にアクセスできるというのも貴重である。典拠の提示もほぼ義務化され（「曖昧さ回避」の措置）、疑問があれば典拠を遡り確認することもできる。特定の知識を個人の専有物とするのではなく、複数の編集作業を通じて、より偏りのない一つの真実に近づけるという理想も美しい。だが誰もが信頼できる知識の提供と進歩という壮大な夢はその実、信を築くためのこまごまとした配慮ゆえに潰える運命にある。作家「シラノ・ド・ベルジュラック」の項目（2018 年 11 月 17 日参照）を一例に具体的に指摘してゆこう。一瞥、著作一覧や参考文献が付され、伝記記述の部分でも地名や固有名には原綴が挿入され、「出典・脚註」では長々と原文とその翻訳が掲載されているために、執筆者はあたかもシラノの原文に親しみ、研究書を要約しているかのような印象を与える。ロスタンの戯曲への言及が短いのも、作家の生涯と創作を混同しないという文学研究の定石にかなう措置である。また「作品の中では」とわざわざ挿入することで、伝記的記述との差異が強調されてもいる。「生まれた」、「入隊した」、「梅毒であった」…という過去形を用いた断言的な記述と、「〜と言われる」、「〜には説がある」という典拠に依拠したことを印象づける表現が対照をなし、あたかも複数の学説をつきあわせて事実を確定したかのようである。しかし複数の典拠をつきあわせた場合、合わせて選択の根拠を示さなければ単に典拠の羅列にすぎないか、判断の恣意性は拭えまい。どの研究書に何故依拠しているのかも判然としない。さらに「『レ・マザリナード』---宰相マザランを風刺した詩集の一つ」という表現一つにしても、これが辰野―鈴木からの借用であるのは明らかであるが、その旨言及はない。この辺りの記述が二人の訳者による思い込みであることは本論において既に指摘した通りで、項目の執筆者は訳者の疑わしい手続きの産物を鵜呑みにしていることがわかる。『レ・マザリナード』の定義を知らず調べもせず原典も確認しないで権威をそのまま信じた結果であろう。「詩集『レ・マザリナード』を書くが」という記述もこの類いである。存在しない作品を著作扱いし、「王権に逆ら」い、「年来の友人たちと次々に諍いを起こした」証左とすること自体、そもそも辰野―鈴木の受け売りであるが、加えて権威に反抗しつつ風変わりな作品を執筆したとする伝統的なシラノ像が透写されているわけである。半世紀以上も前の解説ならいざ知らず、現代の研究を標榜するには明らかに知識にも正当な手続きにも欠けている。しかし匿名による執筆であるからには、声高に否を唱えても批判自体空しいばかりであろう。こうして（怪しい）情報源が一つ増えたという他、この Wikipedia の項目は、学術上の真とか信には何もつけ加えてくれない。おそらくわれわれの社会において、日々進歩する学術状況に合わせて柔軟に書き換えのできる匿名の事典という高邁な理想が実現することはない。この項目を含む、これまでの「シラノ」をめぐる言説全体は、文学作品とそこから読み取れる作家像を截然と分つよう努めてきた。このような営みに対し、本稿では記述という観点から伝記記述を捉えた結果、

曲は研究書や解説同様、シラノに関する一つの伝記記述である。またその他の伝記も必ず誰かが書いたという意味で記述された創作なのである。結局のところ今日の伝記記述は、記述者が執筆行為のフィクション性を意識しつつ、基準と典拠となる構築原理を明示しながら記述を試みるという一点において、辛うじて成立する分野に違いないというのが、本論執筆者の立場である。

部分的には両者の境界を否定することになった。真／偽、実在／創作なる区分とそれらを導き出す判断、そこから導き出された方法論が、記述というものの根本的な性質に必ずしもなじまないからである。